

# 講義の風景

## 「アカデミックインターンシップの全学的展開」

「特色ある大学教育支援プログラム」  
採択記念シンポジウム  
(03・12・10——8303号教室)

### COEに次いで採択される

03年度に始まった文部科学省が認定する「特色ある大学教育支援プログラム」。これに中央大学の「アカデミックインターンシップの全学的展開—教育とキャリアデザインの融合をめざして」が採択された。

02年度からの、世界的な重点研究拠点を定めるCOE (Center

rof Excellence) には理工学部・辻井重男教授をリーダーとする「電子社会の信頼性向上と情報セキュリティ」が選ばれている。

「大学教育支援プログラム」の申請は初年度私立大学では338校を数えた。昨年9月の審査で採択されたのは26校で採択率はわずかに7・7%。COEと並んで、採択されるかどうかは大学評価を左右する指標としても大きいのである。

「アカデミックインターンシップ」とはどういうものだろう。とりわけ、実際に企業や自治体で実習研修する学生の立場からみてどうか。シンポジウムでは、インターンシップを体験した5人の学生の報告があった。いわば広義の「講義の風景」として、傍聴したのである。

### 312人が実習体験

角田邦重学長のあいさつのあと、小口好昭経済学部長がインターン

シップへの取り組み全般について基調報告。アカデミックインターンシップは93年経済学部公共経済学科に始まり、現在は単位認定を伴う正規科目として各学部で設けられ、実習派遣先も多様化している。これは別に職業への関心を高めるためのキャリアセンターの「キャリアアデザインインターンシップ」があり、03年の参加者は計312人にも上ったという。

### 多摩市役所で

「わたくしは、この夏、アカデミックインターンシップに参加いたしました」

最初の報告は経済学部産業経済学科3年(シンポジウム当時。以下同)の幅健吾さん。

「自治体」コースを選び、まず春にレポートを提出。中大学生にはおなじみ、聖蹟桜ヶ丘の駅前複合物の問題などを取り上げた。そして8月に2週間、多摩市役所でインターン

シップ体験。地域の企画・開発業務に取り組んだ。

「期間は短いけれど、内容は厳しいものでした」という。

行政の裏に回ると並々ならぬ努力があることを知った。自発的な行動責任ある態度、コミュニケーション能力など、社会人として求められるものも多い。しかしそれだけにやりがいも感じた。

「民間企業との迷いはなくなり、浪人しても公務員、という強い覚悟が出来ました」

長野・諏訪市の出身。「東洋のスイス」と呼ばれる地で地方公務員に、の夢はより強固になったようだ。



「インターンシップは貴重な体験」という報告が続いた。  
写真は万膳敬太郎さん

### スリランカや都庁実習

次は総合政策学部国際政策文化学科、万膳敬太郎さんの報告。ここでは唯一の2年生。

「以前トルコへ交換留学した際、ストリートチルドレンを助けたいと思いました。今回のインターンシップを通し、その具体的アプローチに近づくことが目標でした」

国際派である。ちなみに昨年11月の第四回中央大学学長賞英語スピーチコンテストでは、3位に入賞した。実習先はスリランカ。和栗百恵特任講師の「国際インターンシップ」コースの1人としてNGOサルボダヤに合流して、農業や教育の現場に立ち合った。

「貧困に対して偏見を持ち、また知識だけで分かった気になっている自分に気づきました。コミュニケーションの大事さも実感しました」

まずは信頼関係の構築ありき。一緒に活動した青年海外協力隊から学んだことだという。帰国後は報告会、写真展、近隣の小学校での教育活動を通して、体験の理解を深めた。万膳さんに「どう生きるか」を深く考えさせたインターンシップである。

「今後はアメリカへの留学、大学院への進学を考えています」と語った。法学部政治学科3年の鳥山亮太さんは、夏休みに東京都庁住宅局で20日間のインターンシップを経験した。

「2年次の授業で地方自治体に興味を持ちました。また、インターンシップを経験した友人を羨ましく感じ、応募しました」

たしかに。インターンシップ後の学生は半分社会人のような、なかだか一回り大きく見えてくる。学生がインターンシップに挑戦するきっかけは案外そんな憧れだったりする。

鳥山さんが取り組んだのは、窓口相談業務補助など。

「自分にできるのかと、とても緊張した」そうだが、親切な職員に教えられなんとかこなした。「電話は絶えず鳴っていました、一つ一つに丁寧に対応する職員に感心しました」

担当外の問い合わせにも真摯な対応。職員同士の情報交換も怠らない姿に認識を一新しながら、「一方、自分は指示を待つばかりで、時間を無駄にしてみました」。

反省も胸に、鳥山さんは地方公務員への意欲を高めている。

「将来は、住んでいて良かったと思われるような町をつくりたいと思っています」

### ドイツ銀行に1カ月間

夏休みに1カ月にわたり、ドイツ銀行フランクフルト支店で企業研修した人もいる。最後は、商学部金融学科4年の長崎豊澄さんの報告。

「2年次にテュービンゲン大学に短期留学したことや、授業でヨーロッパ経済に興味を持ったことからドイツに興味がありました」

好きなドイツ語を磨くためにも、インターンシップは旅行よりも効果的だと感じられたそうだ。

入学当初から金融に興味があった。昨年のうちに大手証券会社に内定、4月入社した。今回のインターンシップでは、ドイツ銀行の経営戦略や扱っている金融商品のマニュアルを読んで検証し、「ドイツ銀行の行員として」自分なりの意見をまとめかつ今後の見通しを報告するとい

う作業までこなした。

「正直、骨が折れました」

ドイツ語と日本語。翻訳に翻訳を重ね、金融についても深く考える機会となった。会社人として、時間や仕事に厳しさも求められた。

「しかし働いたときに充実感を感じました。この業界を選んで良かったという確信が持てました。早く会社で働きたいと思います」

大学四年間の総括としての貴重な体験が伝わってくる。

式典後の懇親会で、長崎さんはわたしにインターンシップを熱烈に勧めてくれた。

「だけどやっぱりねえ、海外に行く場合は最低言語くらいできたほうがいいよ」

報告会にはなかった優しいアニキの顔を見せた。

「5日前のリハーサルで、話が長過ぎるって言われて台本削ったんだよ。淡々としていて、つまんなかつ

たでしょう」と、これはすまなそうな顔で。

正直堅かった。これがシンポジウムというものと感じたのだが。会場には、インターンシップ受け入れ先の自治体や企業関係者の姿もあった。学生の体験報告を、どう聞かれたか。

### 「中大モデル」受け入れ先も拡大

「中大生は、いい意味であか抜けない印象があります。それだけ人懐っこく、場に溶け込むのがうまいと感じています」

阪和興業の伊藤さんはそう語ってくれた。

受け入れ側の温かい目を感じる。

「中大モデル」のインターンシップも、まず信頼関係ありき、にちがない。後半のパネルディスカッションと合わせ、インターンシップの着実な広がりを感じさせるシンポジウムとなった。

(学生記者 江部理恵 法学部4年)